

# みらいしんきん同友会40年、 新たなるステージに向けて。

MIRAI SHINKIN  
DOUYUKAI  
40th Anniversary



## 40年の節目を機に、考えておきたいこと

1976年11月に発足したみらいしんきん同友会は、今年で創立40周年を迎えます。「経営者がともに手を携え、情報交換や異業種交流を通じ、厳しい環境を乗り越えていこう」という主旨のもとスタートし、現在はエリアも県北地域にまで広がり、会員数は約1,550名を数えるまでに至っています。

発足当初から同友会運営に携わっている樽谷壽生氏(鉄輪支部)、唯一の女性常任幹事である村瀬久美子氏(高城支部)、県北地域で美味しい「食」を提供する大倉莊三郎氏(中津北央支部)ら常任幹事の皆さまに集まっていたが、大分みらい信用金庫の関啓二理事長と、同友会活動について座談会を開催しました。

## 同友会会員になってよかったことは？

**樽谷** 私は同友会発足当時の会員で、“生き字引き”と言われています(笑)。当時は第1次オイルショック後で全国的に中小企業が疲弊し、別府の商店街でも店を閉める先が出はじめていました。アフリカンサファリの開業前にも関わらず、これから別府はどうなっていくのか不安でしたね。そこで別府信用金庫(当時)と地元経営者が同じ土俵で勉強を重ねて情報交換を行い、地域経済を活性化させようと発足したのが同友会です。当時はまだ32歳と若かったのですが、いきなり常任幹事に抜擢されました。地元の方々との接点が少なかった私ですが、同友会をきっかけに交流の輪が広がりました。

**村瀬** 私は今年から常任幹事に就任したのですが、高城支部も会員同士や信金職員との距離感が非常に近く、いい雰囲気です。もともと母親が別府信金と取引があり、私が20代で会社を立ち上げるようになった時、思い切って融資の相談に行ったのが取引のはじまりでした。実はその時の担当者が、まだ得意先係だった関理事長なんですよ。

**関** お母さんとは長い取引で信頼関係がありました。「お母さんを泣かせちゃいけないよ」と言ったのを覚えていますよ(笑)。

**村瀬** おかげで今も事業を続けており、後任の担当者も何かと親身になってくれます。同友会会員の皆さんは、多かれ少なかれそういうエピソードがあるのではないのでしょうか。

**大倉** 当社は豆腐屋から創業し、その後私が総菜屋と外食店を始めました。30歳で父親から会社を受け継ぎ、会社の印鑑を渡された時は身が引き締まりましたね。経理や資金繰りも私が手がけるようになり、そこから金融機関と接する機会も増えました。みらい信金になって、安心した取引ができるようになり、地域に根ざした経営方針など共感することも多い。単なるビジネス的なつきあいではなく、腹を割った相談のできる信頼関係も築かれていると感じます。これには同友会の存在が貢献しているのではないかと思います。同友会行事は、お互いの考え方が通じあう場になっていますし、同時に他の会員と横のつながりが深まるのも大きなメリットだと思います。

## 先達者から何を学びましたか？

**大倉** 私は父親から経営を任されたとき、「人に迷惑をかけるな」「信頼関係を大切にしろ」と言われました。それを心に言い聞かせながら経営に携わってきたのですが、商売をしていると、どうしてもうまくいかない時期に遭遇するものです。そこに相談できる金融機関や仲間がいることは、大きな支えですね。

**村瀬** 私は高城支部が開催した講演会で、ある僧侶の方が話されていた「商売と経営」についての講話が、いまだに強く印象に残っています。短期的に物事を考えるか、長期的に物事を考えるかの違いを聴き、あらためて経営者としての意識が高まりました。

**樽谷** 一村一品運動が声高に叫ばれていた頃、鉄輪支部では「まちづくり」をテーマに講演会を開催していました。湯布院町や大山町、長湯温泉、黒川温泉と各地のリーダーを招き、勉強会を重ねました。会員だけでなく信金職員も一緒にこの講演を聴いたことで、「勉強になった」「感銘を受けた」という話を当時の職員から耳にします。20年間で150回

の講演会を毎月開催し、本部から表彰もされましたが、そこから「鉄輪愛酌会」「別府鉄輪湯けむり倶楽部」など様々な活動へと派生していきました。みらいしんきん同友会が発信元となり、自立・発展していった事例になると思います。

**関** 私が尊敬している人物の一人に二宮尊徳がいます。彼の「報徳思想」には、地域づくりと相互扶助の精神が込められており、それを体現したのが信用金庫でもあります。同友会もこの考え方を源流に、地元経営者がお互い助け合い、地域活性化に結びつくような組織にしたいと思っています。

**大倉** 県北地区では、本店・野口支部、南支部、山の手支部が開催した婚活イベント「みら婚」を、今年の秋に開催しようと計画中です。同友会会員企業に勤務する未婚男女に出会いの場を提供し、少子化対策や地域雇用に結びつきたい。このように他の同友会支部の活動を参考にできるのも、大きな強みだと思います。



**樽谷 壽生氏**  
社会福祉法人  
貴船会 大観苑  
理事長  
鉄輪支部常任幹事

別府市鉄輪東8組 ☎0977-67-8668  
http://www.daikanen.jp/



**村瀬 久美子氏**  
有限会社  
ムラセ運輸  
代表取締役  
高城支部常任幹事

大分市大字迫438番地5 ☎097-527-7227



**大倉 莊三郎氏**  
株式会社  
くらや  
代表取締役  
中津北央支部  
常任幹事

中津市新瀬655番地2 ☎0979-22-1154  
http://o-kuraya.com/



**関 啓二氏**  
大分みらい信用金庫  
理事長

## 未来を担う経営者に向けて

**村瀬** クレーン業界は、人材確保に四苦八苦している状況。免許を取得する努力を怠る者も多く、たとえ取得しても長続きせず退社してしまったりします。ベテランの高齢者が会社を牽引している状況ですが、将来を考えると不安になります。同業他社では女性オペレーターを雇用しているところもあり、意識も高いと聞きます。待遇面も含め、彼女らが働きやすい環境を作るのも女性経営者としての使命です。

**樽谷** 当社では貴船城や山地獄といった観光事業とは別に老人福祉施設を始めたのですが、同じく介護の現場も人手不足です。観光事業が長男、介護福祉事業が次男と、それぞれ経営に携わっているのですが、慣れぬ業界というもあつてか、未熟な部分を感じたりもします。私たちの時代とは大きく変わるなか、余計な口出しはせず、期待をもって見守っています。

**大倉** 当社も息子が一緒に働きはじめたのですが、親子が同じ職場というのは難しいと感じることばかり(笑)。一方、彼が得意とするIT関係では助けられてもいます。2011年に新規事

業として夕食宅配をスタートしたのですが、息子の力がなければできませんでした。人手不足が続くなか、当社も新卒採用をするようになり、同友会主催の新入社員研修が役立っています。女性の戦力化も含め、中小企業の人材育成は大きな課題ですね。

**村瀬** 当社も息子が後継者として働いており、未来経営者スクールに参加していました。毎回勉強になったと報告を受けていましたが、その場限りで終わらせず、その時の気持ちを絶やさぬよう鍛えてもらいたいですね。

**関** 同友会会員のなかには、先代から事業を引き継ぐ方、あらたに起業する方と、様々な若手経営者がいます。先輩経営者とは別に次世代経営者が集まり、広い視野で切磋琢磨しながら経営手腕を磨いていくことも可能です。その一方で、経営の一端を退いた方々から学ぶことも多く、各世代の経営者をトータルで結びつける仕掛けづくりも、必要なと考えています。地域経済の未来に資するよう、私共としても努力していくつもりです。

## アラフォー世代が考える「経営者に求められるもの」

みらいしんきん同友会の創立当時に生まれた次世代経営者に訊く

KEY WORD

育成

## 株式会社 麻生塗装

(南大分支部会員企業)

大分市星和台1-8-1  
TEL 097-569-6710 FAX 097-568-3121  
URL <http://www.protimes-oitachuo.jp>



## “人を育てる”ことが企業の使命と実感

そのガッツリした体格から、見るからに気骨あふれる頼りがいのある風情の株式会社麻生塗装の麻生英治代表取締役。学校卒業後は様々な仕事を経験して“武者修行”を重ね、家業に就いたのは23歳の時。「体育会系といいますか、自分たちの世代では珍しいタイプですよ」と笑いながらも、親分肌の性格は人望も厚く、企業や地域を牽引するリーダーとしての素養は十分にあると言っても過言ではありません。「先代社長である親父とは喧嘩ばかりで、気があうといえば趣味のハーレーダビッドソン(オートバイ)に乗ることくらい(笑)。経営も手探りで自社のスタイルを切り拓いてきたのですが、唯一、親から引き継いだものといえるのは仕事に対するこだわりの姿勢。どこにも負けない自信があります」

職人集団としてのプライドの“証”を力強く話す麻生代表取締役ですが、その一方で社員と業界の将来に気を配ります。「我々の業界は“職人が商品”ともいわれ、職人が持つ技術力がセールスポイントになります。しかし、そのぶん会社に帰属するよりも独立していく者も多い。待遇も含め、社員にやりがいと目標を持ってもらい、いかに会社の魅力を高めていくかです」

先日は自ら採用した若手社員の結婚式で、人間としての成長ぶりを目のあたりにし、人を育てることの大切さと喜びを噛み締めた麻生代表取締役。「企業は人なり」という言葉を実感した瞬間でした。

代表取締役

麻生 英治氏  
(1974年・大分生まれ)



KEY WORD

地域

## 有限会社 ことことや

(湯布院支部会員企業)

由布市湯布院町川上3000-1  
TEL 0977-85-3168 FAX 0977-85-3797  
URL <http://www.kotokotoya.com>



## 地域で生きていく経営者の在り方とは

2016年4月に発生した熊本地震で、大きな被害を受けた湯布院町。この地震から41年前の1975年4月、大分県中部地震が発生し、同様に全国ニュースで報じられたことを記憶されている方も多いことでしょう。しかし、そこから本格的な湯布院のまちづくりがスタートし、再び全国から注目を浴びる存在になったのです。

「今年の秋、そのまちおこしの原点のひとつだった『ゆふいん音楽祭』が復活します。震災復興イベントというものではなく、湯布院の落ち着いた雰囲気のなかで暮らしていくありがたみを、一度立ち止まって考え直そうとなったのです」

2009年に音楽祭を休止した時の実行委員を務めていた、有限会社ことことやの瀧野恵太氏は話します。同社は、老舗旅館・亀の井別荘の茶房・天井棧敷で働いていた母親が手作りではじめたジャムが評判になったことを契機に工房として創業。カフェ『ジャムキッチン&カフェことことや』も併設し、手作りにこだわったジャムを作り続けています。

「メシを食っていくための“ライスワーク”と、生きがいを求める“ライフワーク”のバランスを考えることは大切。地域で商売させてもらっている自分にとって、まちおこしはライフワークでもあります」

まちおこしの先人たちが、身近にたくさんいることでも恵まれた環境にある湯布院。「あらためて、じっくり話を聞き直したい」とも話す瀧野氏でした。

瀧野 恵太氏  
(1974年・由布市在住)



KEY WORD

挑戦

## 宇佐養魚 株式会社

(宇佐中央支部会員企業)

宇佐市院内町月俣45番地  
TEL 0978-34-3857 FAX 0978-34-3858



## どじょう生産日本一を導いた静かなる情熱

実は大分県は国産どじょう生産量で日本一。年間生産量は20トンを超え、どじょうすくいのお祭りや有名な島根県の約4トンを超え、東京の老舗どじょう店でも扱われています。「その昔、どじょうは日本全国どこでも食べられていた食材で、海がない山村地帯では貴重なタンパク源でした。当時は水田に生息していたのですが、環境の変化や河川改修で希少になり、どじょうを食べる文化も廃れていきました」

こう話すのは、宇佐養魚株式会社の日高暁彦代表取締役。大分市生まれの日高代表取締役は大学院で水産学を修得し、大手水産会社に勤務の後、宇佐市院内町で起業。大分県産どじょうの約8割は同社が生産しています。温泉を用い、1年間を通じて養殖できるのも大分県ならではの。「大分県産どじょうは、県が独自に開発した先端技術で養殖されたもの。泥の中ではなく清らかな水で育ち、身はふっくらと柔らかで、カルシウムやビタミンなどの栄養価が高く、コラーゲンも含まれているので女性の美肌効果も期待できます」

独立後は苦勞もしてきましたが、静かに情熱を傾けながら品質を極めていく姿勢が多くの方々の共感と呼んでいます。ときには“おたく”とも揶揄されかねない研究熱心ぶりは、この世代の特徴でもあり、強みでもあります。

「ナマズの養殖にも取り組んでいる」と話す日高代表取締役の、次なる挑戦に期待します。

代表取締役  
日高 暁彦氏  
(1977年・大分生まれ)



KEY WORD

活力

## 別府漬物 有限会社

(山の手支部会員企業)

別府市上原町7-15  
TEL 0977-22-6101 FAX 0977-21-0611



## 自他ともに認める“お祭り男”の思い

自らが経営する別府漬物有限会社の販促イベントだけでなく、理事を務める別府商工会議所青年部の行事や各種地域イベントでも、ひたすら盛り上げ役に徹する三浦好徳代表取締役社長。名刺には“つけもの王子”と書き、時には着ぐるみ着用で元気に呼び込みをする姿を見かけます。「社員の名刺にも“つけもの伝道師”や“つけもの青年局長”といった肩書きを書いていますよ(笑)。楽しく名前を覚えてもらうことで、漬物や別府について興味を持ってもらえますから」

同社の創業は1968年。行商からスタートし、現在は旅館・ホテル等の料理にも供され、もうひとつの“別府の味”として親しまれるほどの人気ぶりです。「漬物は主食にはなれないが、和食には欠かせない伝統的食品。新規参入が少ない業種ではありますが、暖簾にあぐらをかくことなく、代々受け継がれてきた地域の味を守りつつ、あらたな研鑽にも励むことが3代目としての使命です」

食品の規制改革等、経営環境が大きく変わるなか、伝統にしがみついただけでなく、新たな挑戦も必要と主張。名刺には“大分県下初の漬物製造管理士”とも書き添えられ、新しく業界団体が導入した資格認定制度をアピールします。「僕は諸先輩の“モーレツ世代”と、若き“草食世代”との中間世代にあたる。潤滑油として業界や地域を盛り上げていきたい」

明るく笑顔で、その胸に秘めた野心を語ってくれました。

代表取締役社長  
三浦 好徳氏  
(1979年・別府生まれ)

